

 <b>Viet Nam</b>	学校名 : 駒場東邦高等学校 氏名 : 藤山由彦 [ 担当教科 : 公民科 ]	● 実践教科 : 政治・経済 ● 時間数 : 4 時間 ● 対象生徒 : 高校 2 年生 ● 対象人数 : 13 人
--	---	---

1 単元名 : 日本は移民を受け入れるべきか ～ さまざまな人たちと共に生きていくにはどうすべきか

2 単元の目標 : 日本の移民政策に関する現状を理解し、その方向性・問題解決策を検討することを通じて、主権者としての積極的な政治参加や他者との意見調整を行う姿勢を育む。

3 資質・能力育成に向けた授業作りの視点

- (1)意味のある問いや課題で、生徒の学ぶ文脈を造る
- (2)生徒の多様な意見を引き出す
- (3)考えを深めるため、対話のある活動を導入する
- (4)生徒が考えるための教材を見極めて提供する
- (5)学習手段に関する工夫を施す
- (6)生徒が学び方を振り返り自覚する機会を提供する
- (7)互いの考えを認め合い学び合う文化を創る

4 単元の指導について

- (1)教材観 : いま現在社会全体で早急に考えるべき課題であり、当事者としてひとりひとりが積極的に対応することが求められるものである。
- (2)生徒観 : 提示にテーマに関して、みずからの意見を積極的に述べ、周囲とやりとりしながらその調整をはかることのできる集団である。
- (3)指導観 : 選挙権獲得・卒業後の社会での活躍を目前に控える高校 2 年生を対象とし、いま現在もっとも議論と高まっている問題に関して共に考える機会を持つことは、有権者意識を高める等の観点からも有意義である。

5 評価規準

観点	関心・意欲	思考・判断	技能・表現	知識・理解
評価規準	民主社会において主体的に生きる人間のあり方を自己の課題として認識している。	民主社会の倫理を具体的事例に基づいて考え、自己のあり方につなげて考えている。	民主社会の基盤となる倫理観を、みずからの意見として表現できる。	現状に関する知識に関して、的確に理解している。
評価方法	関心・意欲をもって行動することの重要性を理解している。	ともにいきる人間として、相手に配慮した行動を取ることができている。	根拠に基づいたみずからの意見を、相手に対して表明することができる。	世界・日本の移民に関する知識を理解している。

## 6 単元の構成

時限	小単元名	学習のねらい	授業内容
1	「動く動く、ひとは動く」	世界的な人の動き(移民)について, 理解する	世界・日本に関する移民の歴史
2	「変わる変わる, 受け入れるに変わる!？」	日本の外国人労働者政策・移民政策に関する理解を深める	日本における外国人労働者政策・移民政策, その問題点
3	「ベトナムを例にとって」	ベトナムを例にとり, 国家間の人の動きを理解する	ベトナムの歴史 日越間の人の動き(移民)
4	「日本の移民政策をどうするか」	討論を通じた	今後の日本の外国人労働者政策・移民政策に関する討論

## 7 本時の授業案

小単元名 【 ベトナムを例にとって 】

### (1) 指導案

(ア)実施日時 12月6日(水)第2限

(イ)実施会場 第一会議室

(ウ)本時の目標 : ベトナムを例にとり, 国家間の人の動きに関して理解を深める。

次回授業で行う討論の準備として, これまで取り上げた視点・観点を見直す。

(エ)指導のポイント: これまでの授業をふまえ, 次回授業における生徒間の建設的議論を促進するための視点を提示する。

### (オ)本時の展開

過程・時間	指導内容	学習活動	指導形態	指導上の留意点	評価 (評価規準・評価方法)
導入 (8分)	前回まで振り返り 作成マインドマップを見て, ベトナムに関する現状の知識の確認をする	世界・日本の移民に関する知識の確認		興味・関心を喚起させる	移民に関する関心 知識・理解 授業への意欲的姿勢  他生徒意見への反応
展開1 (12分)	ベトナム関連写真を用いた, ベトナムの歴史・現状の確認	ベトナムの歴史・現状に関する知識の確認 日本の現状との比較 フォトランゲージによるSDGs・チェック		既習知識(ベトナムの歴史等)を想起させ, 現在解決すべき問題との連携を考えさせる	知識に基づく論理的思考・判断
展開2 (25分)	日越関係の現状について, 事実をふまえたうえで, 現状把握を行う	日越関係の現状 「友好的」理由を推測する(グループ作業→発表)		既習知識をふまえたうえで, より深く考察する姿勢を引き出す	根拠に基づいた推論・意見表明  他生徒との協調的姿勢
まとめ (5分)	技能実習制度等の問題点とその解決 次回討論へ向けての説明	前回授業をふまえた問題点の指摘		既習知識をふまえたうえで, 解決策提示に向けての思考・判断を引き出す  次回討論へ向けての意欲を引き出す	根拠に基づいた推論・意見表明  討論への意欲的姿勢

(2) 授業の振り返り

- ・前回授業終了時、ベトナムに関するマインドマップ作成を課題とした。バラエティに富むものかつベトナム・日越関係を的確に表すものが集まり、導入として成果を上げた。次に続くスライド写真によるフォトランゲージへとうまくつなげることができた。
- ・ベトナム関連写真を用いたフォトランゲージを実施した。該当写真(2枚)を SDGsの観点からみるとどうなるかを各グループ(3グループ)に問うたが、それぞれ独自の視点から鋭い指摘が寄せられた。話し合いが盛り上がった様子から、展開1の時間を予定よりも長くした。
- ・外務省・厚生労働省ホームページ等よりとった資料(紙、スライド映写)により、ベトナムの概要を説明した。映写状況の見にくさ・教員説明の多少の冗長さがあった点に反省が残った。
- ・前述事項(ODA 金額の多さ・要人往来の多さ等)から日越関係の良好さを指摘し、なぜ良好な関係を保てられるのかを考えさせた。各グループの話し合いは盛り上がり、自分たちで白紙に図解を行う等の工夫をして発表した。これまで培った方法論(話し合い時・プレゼン時)の応用、他科目・日常生活で得た知識に基づく推論(日越間の距離・歴史関係や日本と中国・韓国との関係比較等)の披露等が見られ、十分な成果があったと考える。
- ・教員が訪越前より注視していた事柄(ベトナム留学生・労働者の人権侵害事例)に関する雑誌記事に基づき、前述理由が今後変化(「崩壊」)する恐れはないか問いかけた。期せずして、前日夜「クローズアップ現代+」(NHK)でまったく同様の問題(ベトナム留学生の労働問題)が取り上げられていたことを発表する生徒があり、記事と合わせて、生徒の関心を引いた。
- ・生徒がのってきた雰囲気があったため、まとめの部分で授業時間を超過した。次回討論への余韻を残し、「日本の今後の移民政策」に関する自分の意見をまとめるモチベーションを高めることができた。本日授業が端緒となり、単なる「外国人増加＝犯罪増加」等の俗論に乗ることなく、根拠ある建設的な意見が提示されることを期待したい。

(3) 教材

- ・『最新図説政経』(浜島書店・2017年)
- ・参考プリント(外務省・厚生労働省HP資料等)
- ・「日本は移民を受け入れるべきか」(3回分)レジュメ 等

(4) 参考資料

- ・齊藤光政編『戦場カメラマン 沢田教一の眼』(山川出版社・2015年)
- ・古田元夫『増補新装版 ベトナムの世界史－中華世界から東南アジア世界へ』  
(東京大学出版会・2015年)
- ・伊藤千尋『【新版】観光コースでないベトナム－歴史・民族・戦争を知る旅』(高文研・2011年)
- ・藤巻秀樹『「移民列島」ニッポン－多文化共生社会に生きる』(藤原書店・2012年)
- ・今井昭夫・岩井美佐紀編著『エリア・スタディーズ 39 現代ベトナムを知るための60章【第2版】』  
(明石書店・2012年)
- ・田中治彦・三宅隆史・湯本浩之編著『SDGsと開発教育－持続可能な開発目標のための学び』  
(学文社・2016年)
- ・ベンジャミン・パウエル編『移民の経済学』(東洋経済新報社・2016年)
- ・竹沢尚一郎・稲葉奈々子・高畑幸訳『移住・移民の世界地図』(丸善出版・2011年) 等

**8 単元を通じた児童生徒の反応・変化**

(1) 本単元に入る前の関連分野既習状況(1)

- ・国際政治分野(国際社会と国際法, 国際連合, 第二次世界大戦後の政治動向, 人権状況, 核兵器・軍縮問題, 人種・民族問題, 戦後の日本外交, ODA, NGO等)
- ・国際経済分野(貿易と国際収支, 第二次世界大戦後の貿易・金融体制, 地域的経済統合, 南北問題, 戦後の日本経済等)

(2) 本単元に入る前の関連分野既習状況(2)

- ・SDGsを考える(3時間)
  - ア ポスター(英訳)を見て(個人作業) → 和訳を試みる, 内容説明
  - イ 自分たちの身近な生活にどう関わっているか(グループ作業)
    - 事例を列举して, どの項目が当てはまるか考えさせる

ウ どうしたら学校で周知し、実践することができるか(グループ作業)

- ただの「周知」は意外と容易にできる(全校集会等での通知, 生徒会による掲示等)
- 「実践」につなげていくためにはどうしたらいいだろうか
- 各項目がどのような実践活動を要求するものか考える(3グループ発表)
  - ・地道な活動を行うしかない(基本に立ち返る)
    - 生活・学習生活内で一つずつ丁寧に行っていく(紙・水の無駄遣いをしない等)
  - ・校内ポイント制の導入・・・特典を考える(やる気を起こして実現する)
  - ・17体のキャラクターを作ってより周知に努め, 行動につなげるよう呼びかける活動を常時行う・・・17体すべてに意義づけをし, より積極的な行動を迫る掲示をする

(3) 反応・変化

- ・すでに得ているさまざまな知識を用い, とくにグループ作業の中で, 活発に意見を出し合うことで, 建設的な・具体的な・実現可能なアイデアを提案することができていた。
- ・これまで「大きすぎる」問題として捉えていたことが, 実は自分の身近な問題と直結していることに気づき, 自分の踏み出す「一歩」の重要性を認識するようになった。

9 授業実践全体の成果と課題及び課題の改善策

- ・これまでも国際協力・開発教育に関する授業を実践してきてはいたが, 教員自身の経験不足・不勉強等の理由から, 生徒になかなか伝わらないことが多く, 内心忸怩たる思いを抱くことが続いていた。訪越による経験で多くのことを学んだが, その後も授業にどのように落とし込めばよいか(内容・手法等)に悩み, 研究授業直前までなかなかプランニングができなかった。
- ・それを解決したのは, これまでやりきれていなかった AL 的授業手法にさまざまな取り組む中で, 生徒の主体性・積極性が高まるのを観察し, ある種「生徒任せ」にしたほうが面白いのではないかと割り切ったところにあった。
- ・この結果, グループ作業に慣れ, さまざまな試みを自分たちで行うことができるようになった状況で, 研究授業に取り組むことができたのが成果を上げたと思う。
- ・もちろん今後進行するであろう AL 的授業形態のなかで, 教員のファシリテーター能力はより試されるところとなり, 授業前準備・授業中観察等の意義が高まるため, 教員自身の研鑽が必要である。

10 教師海外研修に参加して

- ・さまざまな分野におけるベトナムでの日本の国際協力の現状(国際協力機構, 地方自治体, 非政府組織等の取り組み)を垣間見ることができ, 非常に有意義な海外研修であった。現場の方々から直接説明を伺い, またそれをふまえた意見交換を行えたことは, みずからの認識をより深めることに役立った。勤務校における今後の授業を考える上で, またみずからの今後の人生を見直す上でも大変意義深いものであった。
- ・日頃から授業研究等に熱心に取り組んでおられる教育現場の先生方(しかも幅広い校種)と交流することができ, 大変有意義であった。今回の海外研修に直接関わることのみならず, 日々教育現場で抱える悩み等に関しても意見交換の機会を持つことができたのは大きな収穫だった。
- ・本研修には事後の研究授業・発表の機会があるため, 授業研鑽のための具体的な行動を強く促し, さらに多くの方々との交流を広げるものとなっている。みずからの経験からも, 少なからぬ教師海外研修がただの「思い出」となっている中, 本研修の貴重さが際立つものとなった。